

時制研究：複合過去 - 文学装置としての「完了」表現

1 - 完了と継続

Il a composé ces poèmes (彼がこの詩を作った) というフランス語はまず、詩を「作る」という行為が過去のある時点で完了していることを意味する。これはどんなに遠い過去あるいは現在に近い過去であってもよいが、この語っている現在においてその行為は完了していなくてはならない。Il vient de composer ces poèmes (彼はこの詩を作ったばかりだ) という、近い過去を表すとされる表現は本物の過去に移そうとすると、Il venait de composer ... (彼はこの詩を作ったばかりだった) と、半過去 (未完了) による言い方になり、完了アスペクトの複合過去 (Il est venu de ...) の使用はできない。Il vient de + inf. はアスペクト的には「完了」を表すものではない。

しかし複合過去表現 Il a composé ces poèmes. は単なる完了を表しているのではない。これを Voilà ses poèmes. (これが彼の作った詩だ) あるいは、Ces poèmes sont composés par lui. (彼の作った詩がここにある) というようなフランス語で言っても意味はほとんど変わらないように、完了した行為の結果が現在に繋がっていることを強く含意している。これは完了相を背景とした現在形と言ってもよい。この意味は「ある過去の行為の結果として生じている現在の状態を表す」ギリシャ語の完了形 (シャントレーヌ『ギリシャ語歴史形態論』) に似ている。もともと時に関係なかった畳音や加音 (強意) を完了形に用いるギリシャ語に対し、フランス語では、複合過去に助動詞の現在形を用いることがこの時制の現在の意味を支えているとも言える。

G. Duhamel によれば、Il a composé ces poèmes. は Ils « sont » composés. 「この詩は作られて「ある」」という意味にほかならず、この「作られてある」状態はこれからも続くのである。

F. Villon の『遺言集』の冒頭、... maintes peines (...) lesquelles j'ay toutes receues soubz la main Thibault d'Aussigny. 「多くの苦しみ ... これを俺はすべてチボー・ドシニーの手から受けている」は、「受けた」という完了の意味より、その恨みが残る現在を強調しているのである。

複合過去においては完了した時と現在とは連続している。しかしこの連続性とは心情のそれであり、... してきた、というような日本語で表される行為の連続性または反復性のことではない。

Les hommes ont toujours vécu en société 「人はつねに仲間とともに暮らしてきた」という文の意味は、toujours (つねに) という副詞によって語る現在につながるのもあって、このような継続的意

味が複合過去に内在しているのではない。J'ai ainsi vécu seul, sans personne avec qui parler véritablement ... (St. Exupéry) 「本当に話し合うひともなく、私はこうして一人で（ある時期まで）暮らした（のだった）」であり、「（語っているこの現在まで）暮らしてきた」のではない。「暮らす」vivre という語は、もともと反復的行為を含意しているが、こうして暮らした過去と現在とは、これを語っている主体が自分に関わっているその行為をしみじみ回顧する、その心情において連続しているのである。

『失われた時』の有名な冒頭、Longtemps, je me suis couché de bonne heure. 「長い間、私は早く床についたものだった」は、上のような意味で解釈されねばならない。Longtemps（長い間）という語は、いくら長期にわたっても、その長い期間は今すでに終わり閉じられているとすれば、この「早寝」の習慣を、語り始めたこの時まで引きずってくるわけにはいかない。これを、語っている現在まで早寝行為が続いていることを思わせるように、「... してきた」という表現を用いて訳すことはできない。もっとも、副詞の「長い間」と半過去（未完了）とがすべての動詞において両立しないというわけではない。Pendant longtemps, la seule compagnie de la linguistique était la philologie. (長い間、言語学の唯一のつれあいは文献学だった) という文はバンヴェニストの言葉である。

一方、複合過去の持つ心情の連続性が行為の継続性に変化するためには、toujours といった副詞一つで十分であることは、いま見た通りである。D'aussi loin que je m'en souviens, je l'ai toujours haï. (おぼえているかぎり、私はいつも彼を嫌ってきた) は A. Gide の文である。この「私」は今でも「彼」を嫌っている。

Du plus loin que je me souviens, j'ai entendu la mer (Le Clézio). (想いおこすかぎり遠い昔から、私は海の音をきいてきた) という文章で『黄金をさがす男』Le Chercheur d'or の冒頭は書き始められる。「私の少年期の子守唄」であったこの潮騒は、語っている今でも「私のもっとも奥深いところ」に聞こえるというのであるから、この Du plus loin que je me souviens を toujours と簡略化し、全体を J'ai toujours entendu la mer. (私はつねに海の音を聞いてきた)、あるいは Je n'ai cessé d'entendre la mer. (私はたえず海の音を聞いてきた) と言い換えてみれば、その意味は一層明確になる。

こうして「完了」という文法概念は、一見逆の概念である「継続、連続」という観念にすり変わることができた。静止している事実より、動き、運動の観念に敏感な英語では、現在完了形が、現在に残存する過去の行為のなごりを表す機能のほかに、継続してきた状態を表すことができるのはよく知られている。英語にはこの継続相を強調する現在完了進行形というものもある。英語をよく知る Le Clézio のこの文章のなかには、このような一つの anglicisme を認めることができるのかも知れない。

2 - 大過去の意味の複合過去

さて、いま複合過去のもつ「完了」と「継続」という観念の相関を考えたが、この時制の根本的な意味は、ある完了した事態を背景とした「現在」に他ならない。Brunot・Bruneau は「フランス語歴史文法提要」(Masson & C.) のなかで、中世フランス語の複合過去を現在時制に分類している。これは英語の現在完了形である。事実、Le Clézio が用いる複合過去のいくつかは、語っている現在まで続く継続を表すものであることは明らかであり、この継続相とは英語の現在完了の表すものに極めて近い。これが Le Clézio の文体がもつ *anglicisme* であるとするならば、これはこの作家の、物事の静止している側面よりは動き、継続する側面に対する敏感さを示しているものであるのかも知れない。彼がこの小説で用いる動詞の中には、走る *courir*, 流れる *couler*, くだける *déferler*, 降る *tomber*, 跳ぶ *voler*, とび込む *plonger*, 泳ぐ *nager*, 見る *regarder*, 呼ぶ *appeler*, 聞く *écouter* などといった、物事の動きに対応しているものが多いが、これらはすべて自然の根源的動きと、動く自然物にたいする人間の感覚の極めて素朴な反応を表すものばかりである。

「見る」「聞く」「呼ぶ」といった他動詞は、彼の文章のなかでは対象への方向性、あるいは動きを具体的に示している。動詞の目的としての「対格」とは、ラテン語 *Romam eo* (私はローマへ行く) に見るように、本来それ自体で方向を表すものであり、動詞はそれに添えられて、方向への運動を明確にするものであったが、Le Clézio の文章は特に自然のなかの人間の動き、対象への感覚の緊急の対応を素直に具体的に表している。彼の文章が多くの場合、時を限定しない現在形で書かれていることも、彼のこうした感覚的自然認識と関わりがあるにちがいない。

複合過去のもつ「完了」の観念は、当然の成り行きで「過去」を表すこととなった。「完了」した事態に内在する現在相を強調したものが、現在完了の意味と、それに付随する継続の意味であるとすれば、完了した事態を強調したものは過去の意味にほかならない。英語の学校文法によれば、現在完了形は「数時間前」、「昨日」、「先日」、「先週」、あるいは「いつ」*when?* といった、明らかに過去を表す語句と共に用いてはならない。これにたいし、フランス語の複合過去はこうした制約にしばられず、何年前のことでも、そのときの心情が、語っている現在と通底しているかぎり使用可能である。

「フェラーズ夫人は九月十六日から十七日にかけての夜 — 木曜日 —、死んだ」という文でアガサ・クリスチイの『アクロイド殺し』は始まる。この「死んだ」に用いられた動詞は過去形 (Mrs Ferrars *died*) である。アガサ・クリスチイの仏訳された作品のなかで最も早いものは、この『アクロイド殺し』であるが、この Miriam Dou-Desportes 夫人による仏語訳は 1927 年に出版され、

それ以来版を重ねている。冒頭の英語の過去形は *Mme Ferrars mourut ...* と、単純過去で表された。

この物語は登場人物の一人のある語り手によって語られていることは、翌日の金曜日、朝八時頃、死んだフェラーズ夫人のところへ呼ばれる「私」と称する医師が存在することから判明するのだが、この「私」に用いられる動詞の時制も仏語訳では単純過去である。アガサ・クリスチイの作品のなかでも特に有名なこの作品は、あまりに予想外の人物が犯人であるため、トリックの無理を指摘する評者も少なくない。

フランス語ではこのような英語の完了した過去を翻訳する時制として単純過去か複合過去が使われる。単純過去は過去の行為と、それを語る現在との心の連続が感じられず、語り手が用いる場合は客観化された「私」の時間史を読むがごとくである。単純過去は、読者が語り手に対し自然にもつ一致幻想からこの *je* を切り離し、これを他の登場人物と同じ地平に置いてしまう働きをもつ。一方、複合過去は語り手の現在に深くかかわり、ひいては読み手との共犯性さえつくり出してしまふ。つまり複合過去の *je* は、語られる者、語る者そして読者をも含めた共感ゾーンをつくりあげてしまうのである。

「アクロイド殺し」の文法的トリックはこのような意味で、仏語訳においては不当なものではない。英語の過去形は形の簡便さはあるものの、フランス語でははっきりと分けられている語り口の親密度の二つの区別がないだけに、コミュニケーションの心情的差異は動詞の形ではなく、スタイルの微妙な違いで表現されねばならない。英語で書かれた『アクロイド殺し』はこうして推理小説として、いくらかの否定的評価を許すこととなった。

「きょう、ママが死んだ」 *Aujourd'hui, maman est morte.* で始まる『異邦人』の冒頭の語り口の気安さは、*Aujourd'hui, maman* といった口語的語彙のほかに、以上述べてきた複合過去の使用が関係している。ここで、*... maman mourut* と単純過去を用いることは容認されない。これはバンヴェニストが、*je fis* という表現は、物語 *récit* でも (*je* が用いられているから)、語り *discours* でも (単純過去であるから) 認められないと述べた (「フランス語動詞の時の関係」『一般言語学の諸問題』1959) のと同じ理由である。*Aujourd'hui, maman, je* といった用語は物語 (歴史) の文体に合わず、単純過去はこうした語を多用した親しい語りの文には適さない。『異邦人』の語り口 (ひいては文学) の基調を決めたのは、この短い冒頭であり、この語りの通奏低音は最後まで続く。

「長い間、私は早く床についたものだった」という複合過去の冒頭が、膨大な『失われた時』のなかで果たしている重要性は、プルーストがこの短い文章の決定を見るまで何度となく試行錯誤を続けていることから垣間みられる。この意味で、ここに用いた人称 (*je*) や、時制 (複合過去) は、大曲の A 音とでも言えるものだったが (Bardèche, *Proust Romancier*. Tome 1, p 248)、こ

の小説がすべてこの調子で書かれたわけではない。はじめ読者と同じ次元で登場した話者は、物語が進展するにつれて複雑化し、コンプレに移ったところには第三者的に客観化された *je* に単純過去が頻用されるようになる。「私はルグランダンの家のテラスで一緒に食事をした」 *Je dînai avec Legrandin sur sa terrasse.* (プレイヤー旧版 1, p 127) は、複合過去の冒頭が早寝の寝室場面を親しくつむぎ出したように、この庭での食事の場면을客観的に導入する文である。機能は同じようなものでありながら、前者は複合過去、後者は単純過去が用いられた。『失われた時を求めて』の語りの位相は『異邦人』よりはるかに複雑である。

「完了した状況を背景にもつ現在」であった複合過去は、こうして完了という事態にアクセントが置かれた場合、過去を表す方便となったが、語る現在とのつながりは心情的なものとして残り、語りそのものと語り手とをつなぐすぐれた文法装置となった。

複合過去によるこうした語る（あるいは、読む、聴く）現在にとって親密な過去表現は話し言葉でも書き言葉でも多用されるようになった結果、複合過去は完了相よりも過去相を表すふつうの形となった。ここで生じた問題は、それでは完了相はどのようにして表したらよいか、ということである。

J'ai eu couru, j'ai eu mangé というような複複合過去 *passé surcomposé* が生まれた素地はここにあったとバンヴェニストは想定している（前掲論文）。*J'ai eu mangé* という形は、*je mangeai*（単純過去）が *j'ai mangé* にとって代えられたのと同じくみで *j'eus mangé*（前過去）の代わりとして生じたという説があるが、複複合過去は単純過去や前過去が頻繁に使用されていた古い時代から、その存在が確認されている。グレヴィスの *Le Bon Usage* によれば、13 世紀にはすでにみられるこの形は民衆レベルの生命力を未だ失っていない。このようなことから考えられるのは、完了形が過去という客観的「時」を表すのがふつうになっても、完了という、いわば言葉の主観的アスペクトを強調しておきたい心情はつねにかかわらずあったということである。

英語の完了形はどちらかという事態の動いている側面（継続、反復）を映すのにすぐれ、フランス語のほうは動いている事態よりは完了状態の認識に敏感であるように思える。『アクロイド殺し』の冒頭、死人の出た家に呼ばれた医者である「私」は、「もはや手のほどこしようがなく」「死んですでに数時間経っていた」 *She had been dead some hours.* ことを確認する。仏語訳はここで完了形（大過去）を用いることに抵抗があり、「死は数時間前にさかのぼっていた」 *La mort remontait à plusieurs heures.* と、完了した状況の内容を半過去で叙述するのである。

「川を泳いで渡る」を、英語は *swim across the river* と、泳ぎ（運動）自体に注目し、「渡る」という行為は前置詞で軽く触れるのみであるのにたいし、フランス語は、*traverser la rivière à la*

nage と、行為の目的あるいは結果に着目し、その方法（泳ぎ）は副詞句で付け足す。フランス語では、運動や継続状態という動いている状態ではなく、その目的あるいは結果に敏感だ。ものを認識する視点あるいは価値観が英語とは異なっているのである。

Denis, lui, m'a regardé sans bouger. これだけでは「ドゥニは動かずにじっと私を見た」という意味であろうが、Le Clézio の文中では少々ニュアンスが異なる。『黄金をさがす男』の「私」は、ある河口でしばし泳いだ後、陸にあがり、体を拭かずに服を着る。髪は塩でまだべっとりしている。こうした「私をドゥニは動かずにじっと見ていた」のである。現在形が基調となっている文のなかのこの複合過去は、過去のある時期（泳いでから陸にあがり、服を着るまで）継続していた一つの行為（見る）を表すものにほかならない。

ここで複合過去が表していたものは一回性の行為ではない。この複合過去のもつ継続的意味は、そのすぐ後の複合過去、*Assis à l'ombre des veloutiers, il est resté immobile.*（ビロード樹の木陰にすわって、かれはじっとしている/いた）でよりはっきりと説明される。ここは「動かずに私を見た」（完了）ではなく、その間、彼はそこに「じっとして」私を「見ていた」（未完了）である。この文の基調である現在形を、過去現在と呼ばれる半過去に移してみるとこの複合過去の意味はより鮮明になる。基調である前後の現在形を半過去におくと、この部分の複合過去は *il était resté immobile* と時間の継続を意味する過去完了（大過去）にするしかない。しかしこのようにしてみると、現在/半過去、複合過去/大過去は、完全に平行な関係をなしているのではないことがわかる。大過去は過去の「継続」していた行為を指すことが自然に可能であるのにたいし、複合過去は現在以前に継続していた行為を表すためには、ここでは *A l'ombre ..., il est resté immobile.* というような特別なコンテキストの助けを必要とする。複合過去の特異性である。Le Clézio の現在形は過去（半過去、複合過去）と同義である。この継続的意味の複合過去は、文の基調を現在形にしていることから生じたものである。

付記：この文章は1993年3月、『明治学院論叢』521号に載せた、〈「完了」および「未来」に関する覚え書き〉（1992年、東大本郷での「フランス語学概論」講義ノート）のなかの「完了」に関する部分を書き改めたものである。

2008年6月 工藤 進

〈下の A), B) はル・クレジオの『黄金を探す男』からの文章。A') A'') A''')、B') B'') はその過去時制ヴァリエーションである。現在形主体の原文を過去形に置くと、A''), A'''), B'') の、半過去と単純過去併用が自然である。半過去主体の A') B') は情景の現実的描写としては不自然であるが、夢、あるいは幻視の描写としては適しているように思える。ル・クレジオの、一見不自然な現在形主体の原文はこうしたいろいろな時制的解釈が可能である〉

A) Le soleil est haut. La pirogue glisse sur les eaux tranquilles, en silence, poussée par la perche de Denis. (...) Je sens la brûlure du soleil sur mon visage, sur mon dos. Denis a ôté ses habits pour les faire sécher, et je l'imite. Quand il est nu, brusquement il plonge dans l'eau transparente, presque sans bruit. Je le vois nager sous l'eau, puis il disparaît. Quand il refait surface, il tient un gros poisson rouge qu'il a harponné, et il le jette dans le fond de la pirogue. Il replonge aussitôt. Son corps noir glisse entre deux eaux, reparaît, plonge encore. (Le Clézio : *Le chercheur d'or*)

A') Le soleil était haut. La pirogue glissait sur les eaux tranquilles, en silence, poussée par la perche de Denis. (...) Je sentais la brûlure du soleil sur mon visage, sur mon dos. Denis avait ôté ses habits pour les faire sécher, et je l'imitais. Quand il était nu, brusquement il plongeait dans l'eau transparente, presque sans bruit. Je le voyais nager sous l'eau, puis il disparaissait. Quand il refaisait surface, il tenait un gros poisson rouge qu'il avait harponné, et il le jetait dans le fond de la pirogue. Il replongeait aussitôt. Son corps noir glissait entre deux eaux, reparaissait, plongeait encore.

A'') Le soleil était haut. La pirogue glissait sur les eaux tranquilles, en silence, poussée par la perche de Denis. (...) Je sentais la brûlure du soleil sur mon visage, sur mon dos. Denis avait ôté ses habits pour les faire sécher, et je l'imitai. Quand il était nu, brusquement il plongea dans l'eau transparente, presque sans bruit. Je le voyais nager sous l'eau, puis il disparaissait. Quand il refit surface, il tenait un gros poisson rouge qu'il avait harponné, et il le jeta dans le fond de la pirogue. Il replongea aussitôt. Son corps noir glissait entre deux eaux, reparaissait, plongeait encore.

A''') Le soleil était haut. La pirogue glissait sur les eaux tranquilles, en silence, poussée par la perche de Denis. (...) Je sentais la brûlure du soleil sur mon visage, sur mon dos. Denis avait ôté ses habits pour les faire sécher, et je l'imitais. Quand il fut nu, brusquement il plongea dans l'eau

transparente, presque sans bruit. Je le voyais nager sous l'eau, puis il disparut. Quand il refit surface, il tenait un gros poisson rouge qu'il avait harponné, et il le jeta dans le fond de la pirogue. Il replongea aussitôt. Son corps noir glissait entre deux eaux, reparaisait, plongeait encore.

B) Les pêcheurs reviennent. C'est Denis qui les aperçoit le premier. (...) Il nage au-devant de la pirogue, dans l'eau pleine d'étincelles. J'entre dans la mer derrière lui. L'eau fraîche lave ma fatigue, et je nage dans le sillage de Denis jusqu'à la pirogue. Le fiancé nous tend la main et nous hisse sans effort. Le fond de la pirogue est rempli de poissons de toutes sortes. Il y a même un petit requin bleu que le fiancé a tué d'un coup de harpon quand il s'est approché pour manger une prise. Transpercé au milieu du corps, le squal est figé, la gueule ouverte montrant ses dents triangulaires. Denis dit que les Chinois mangent du requin, et qu'on fera aussi un collier avec les dents.
(Le Clézio : *Le chercheur d'or*)

B') Les pêcheurs revenaient. Denis les apercevait le premier. (...) Il nageait au-devant de la pirogue, dans l'eau pleine d'étincelles. J'entrais dans la mer derrière lui. L'eau fraîche lavait ma fatigue, et je nageais dans le sillage de Denis jusqu'à la pirogue. Le fiancé nous tendait la main et nous hissait sans effort. Le fond de la pirogue était rempli de poissons de toutes sortes. Il y avait même un petit requin bleu que le fiancé avait tué d'un coup de harpon quand il s'était approché pour manger une prise. Transpercé au milieu du corps, le squal était figé, la gueule ouverte montrant ses dents triangulaires. Denis disait que les Chinois mangeaient du requin, et qu'on ferait aussi un collier avec les dents.

B'') Les pêcheurs revenaient. Denis les aperçut le premier. (...) Il nageait au-devant de la pirogue, dans l'eau pleine d'étincelles. J'entrai dans la mer derrière lui. L'eau fraîche lavait ma fatigue, et je nageai dans le sillage de Denis jusqu'à la pirogue. Le fiancé nous tendit la main et nous hissa sans effort. Le fond de la pirogue était rempli de poissons de toutes sortes. Il y avait même un petit requin bleu que le fiancé avait tué d'un coup de harpon quand il s'était approché pour manger une prise. Transpercé au milieu du corps, le squal était figé, la gueule ouverte montrant ses dents triangulaires. Denis dit que les Chinois mangeaient du requin, et qu'on ferait aussi un collier avec les dents.